

Solo Exhibition by Kyoko Shindo "48"

新藤杏子 個展 "48"

2018.6.9 (sat) —6.23 (sat)

日、月 休廊 Closed on Sunday, Monday

12:00 — 19:00



48- ashigarami- 2018 25.7×36.4 cm 紙にチタニウムホワイト、ガッシュ

YUKI-SIS

東京都中央区日本橋本町 3-2-12 日本橋小楼 202 03-5542-1669

info@yuki-sis.com <http://yuki-sis.com>

3-2-12- #202,Nihonbashi Honcho,Chuoh-ku,Tokyo

103-0023,JAPAN +81(0)3 5542 1669

YUKI-SIS では、2018年6月9日（土）－6月23日（土）新藤杏子個展「48」を開催いたします。



-48 kakemotare- 2018 25.7×36.4 cm 紙にチタニウムホワイト、ガッシュ

今回の展覧会のテーマは、「四十八手」

1982年東京生まれ。2007年多摩美術大学大学院美術研究領域を卒業。YUKI-SISでは5回目の個展となります。ダイナミックな筆使いで、水彩や油彩など、多くの作品を発表してきた新藤杏子の今回の展覧会テーマは「**四十八手**」です。

想像と現実の狭間にある「いきもの」の営みを描き続けてきた新藤杏子は、水彩で語られる現代の風俗画ともいえる世界観を、「光と闇」、「生と死」、「善と悪」などをテーマに、いきものの根源的な姿として描き続けてきました。

今回のテーマに選んだ男と女の交わり の体位の種類を指す「四十八手」は、もとは江戸時代に絵師が書いた浮世絵春画が元になり、「江戸四十八手」とも呼ばれ今にいたります。この「48」という数字は、江戸時代の相撲の決め技48手が由来となっているとされ、古来から日本では「縁起の良いたくさん の数」という意味で、様々な種類のあるものに「48」という数字が使われてきたといえます。

新藤は今までも、春画などの男女の交わりなどをモチーフに多くの作品を発表してきました。彼女の持つ筆使いの特色—下書きなしで一気に描かれる線—は、動きと流れを感じさせます。今回発表される「48手」の作品は、チタンホワイトという画材で黒い紙に描かれています。

一見滑稽にみえるそのひとつひとつの体位ですが、どこか切なくなるような刹那さや狂気さを作品から感じられます。それは人間本来に備わる欲望と、一瞬の美を描いているからなのかもしれません。

今回描かれた「48手」は、48枚の原画とともに、新藤杏子のこだわりとともに作られた桐箱入りのプリントも限定10部で発表されます。



-48 negoshi- 2018 25.7×36.4 cm 紙にチタンホワイト、ガッシュ

【Artist Note】

ドローイングを1日1枚描くようにしている。
全くうまくいかない日もあるし、興にのって何枚も作ることができることもある。

ドローイングを毎日描くのは、自分の感覚や考えを丁寧に確認して反芻する作業であり、日々の記録を日記のようにとっていくためでもある。

そして、営みを作品のテーマにしている私にとって
絵を描くという行為が日常に溶け込んでいる、ということがとても大事なのだ。

48手はその中で出てきたドローイングの一部だ。

「人間の営み」という面と、「毎日描く」という行為がリンクし、
48手の一つを選び、描いた。
それがやがて連続したドローイングとなり、一つの形になった。

新藤杏子